中国語のショートショートの代表的作家——凌鼎年

フランソワ＝カール・グシュエンド（François-Karl Gschwend）
ジュネーヴ大学文学部東アジア研究学科中国学専攻（Université de Genève）

周知の通り、中国文学は悠久の歴史を有し、アジア圏を超えて世界中に知られている。有名な例としては、司馬遷の『史記』、唐宋詩や魯迅の小説等が挙げられ、どの時代のジャンルも世界各国の中国研究者の関心を集めている。しかしながら、上述のジャンル以外では、おそらくほとんど誰も聞いたことのないものも存在しており、それが「微型小説」[★1]、つまり「ショートショート」[★2]というジャンルなのである。

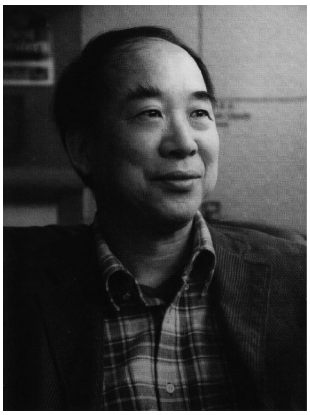
本稿は一石二鳥を狙ったものである。まず、中国語のショートショートという概念に焦点を当て、その特徴を分析する。次に、九〇年代初頭から活躍する代表的作家、凌鼎年の経歴を紹介し、その唯一無二の文体を詳しく研究していく。

1　ショートショートとは

一般的に「ショートショート」という言葉を聞いたことがある人は少ないと言って良いだろう。聞いたことがあったとしてもその意味をよく理解しない人が大半ではないだろうか。簡単に言うと、ショートショートというのは独自の特徴を持つ、実に興味深い文学ジャンルである。この言葉は英語に由来し、「short short」、つまり「short fiction」（短い話、小話）という意味である。ショートショートの専門家である渡邊晴夫[★3]は、「Short short は一九二五年から一九四五年にかけて盛期を迎えた小説形式で」[★4]あると指摘している。

日本では「短編小説」や「掌編小説」といった言葉も存在しており、両者ともショートショートに多少似ている。しかし実際には、前者はより長く、後者は短いという差異[★5]があるため本稿では触れない。

中国語文学がある中国や台湾などアジア諸



凌鼎年〈リンディンニエン〉
（1951〜）

国では、「千字小説」や「小小説」等、ショートショートに相当する多種多様な言葉が存在しているが、最も一般的に使われているのは「微型小説」という言葉である。文字の通り、「超小型の小説」という意味を表す。

日本で有名な作家、星新一（一九二六－一九九七）は、一九六〇年代からこのジャンルを日本国内に普及させ、数え切れない作品を世に送り出している。例えば、代表作として『ボッコちゃん』[★6]が挙げられる。日本に比べて中国では、ショートショートは改革開放以降、つまり八〇年代半ばから普及し始めた。

中国以外ではほぼ知られていないものの、この文学ジャンルは研究の対象となっている。日本では上述の渡邊晴夫が有名な研究者の一人である。渡邊は特に中国作家の凌鼎年の作品を研究し、すでに数点を和訳している。[★7]これをきっかけとして、二〇〇五年、世界各国のショートショートを扱った『蓮霧』[★8]という専門誌を創刊し、現在でも定期的に刊行している。

2　ショートショートの特徴

続いて、ショートショートの興味深い特徴を分析する。筆者のこれまでの研究から、ショートショート作品には次の五つの特徴が確認できる。

1　字数が少ないこと
2　登場人物が少ないこと
3　奇想天外な結末
4　社会に対する批判的態度
5　皮肉と風刺の要素

2・1　字数が少ないこと

字数が少ないことは、上述の五つの特徴の中で最も判断しにくい特徴であろう。なぜなら、同じ内容の一文を書くにしても、言語によって必要な文字数がかなり異なるからである。ここで日本語、中国語[★9]及びフランス語で書かれた一文を例に、字数の問題を分析しておきたい。

図1に示した通り、日本語では「狼が来た。」という簡単な文章がはたして5文字なのか、8文字なのかは、漢字か片仮名によって若干異なる。続いて中国語の文を見ると、漢字のみの使用で4文字になることが分かる。最後に、フランス語の場合はやや難しく、文字を数えるか、言葉（単語）を数えるかによって最終字数が大幅に異なってくる。概して言えば、ショートショートの字数の最上限を定めるに当たっては、中国語が最も簡単であるのに対して、日本語とフランス語は非常に難しい。

字数の数え方という問題を確認した上で、次にこの三言語の字数の基準に目を向けたい。日本語のショートショートは３２００字前後に納める必要があり、それ以外は短編小説と

日本語	狼が来た。	５文字（句点を含む）
	オオカミが来た。	８文字（句点を含む）
中国語	狼來了。	４文字（句点を含む）
仏語	Le loup est venu.	１７文字（句点とスペースを含む）、４つの言葉（単語）

図1

みなされることもある。[10] これに対して中国語の場合は、研究者によって多少の違いが存在している。一般的に２５００字以内[11]というのが基準ではあるが、渡邊は「字数は二千字をこえるものもあるが、一千字以内が好ましいとされている[12]」と指摘しており、その基準を１５００字前後としている。最後にフランス語では明確な制限はないものの、約１０００語[13]が最上限ということを定めた研究者や翻訳者がいる。

本稿では、中国語のショートショートの平均字数を求めるために、凌鼎年の25作品について[14]、句読点を含めた文字数を算出し、次の二つの表にまとめた。

図２はフランス語で既に出版された凌鼎年のショートショート、**図３**は今後出版される予定の作品を示している。緑の欄は渡邊が和訳した作品で、白い欄は未翻訳のため筆者がタイトルを直訳したものである。字数の欄を詳しく見ていくと、前者の平均字数は１５２４字[16]、後者は１４１６字である。結論として、選択された25作品の平均字数は１４７０字であり、渡邊の基準（１５００字以内）の方が事実に近いことが分かる。

結論としては、字数の基準は五里霧中の状態にあり、その設定はほぼ不可能であることが分かる。

フランス語で出版された凌鼎年の微型小説

中国語のタイトル	日本語のタイトル	文字数（句読点を含めて）
長生不老藥	不老長寿の薬	1422
輻射鼠	放射性のネズミ	1603
荷香茶	蓮茶	2150
皇帝的新衣，第二章	続「裸の王様	1361
菊痴	菊愛好家	1396
秘密	秘密	905
難忘的方蘋果	忘れ難き四角いりんご	1305
讓兒子獨立一回	しばらくの間、息子を自立させよう	1152
殺手	殺し屋	1539
天下第一椿	天下一の切り株	2001
相依爲命	助け合って生きる	1619
殉節	殉節	1657
弇山幫	弇山の不良たち	1708
		1524

図２

フランス語でまだ出版されていない凌鼎年の微型小説

中国語のタイトル	日本語のタイトル	文字数（句読点を含めて）
茶垢	茶渋	956
此一時彼一時	今は今、あの時はあの時	1292
法眼	法眼	2075
紅色蒼茫的黃昏	赤々としたたそがれ	1119
狼來了	狼が来た	1517
了悟禪師	了悟禅師	1397
那片竹林那棵樹	あの竹林のあの木	1356
四要堂子孫	四要堂の子孫	1703
天使兒	天使	1505
誤墨	墨の誤り	793
藥膳大師	薬膳の名人	2102
有錢無錢	貨幣を持った貧乏人	1173
		1416

図３

2・2　登場人物が少ないこと

もう一つの注目すべき特徴は、登場人物が少ないことである。また、主人公でさえ詳しく紹介されていないこともよくある。この特徴を説明するために四つの例を挙げたい。

例1：「了悟禅師」[★17]

了悟禅師が海天寺に来てから、海天寺内の平穏は打ち破られた。**法眼方丈**がどうして了悟禅師に留まるように求めたのか、**僧侶たち**はどうしても理解できなかった。いっそうわからなかったのは、方丈が了悟の異常な行いをなぜ容認しているのかであった。[…]（強調筆者）

「了悟禅師」の冒頭の情景は以上の通りである。抜粋で確認できるように、主人公の役や職業（禅師、方丈、僧侶）以外は、年齢や外見等、他の情報は何も分からない。

例2：「忘れ難き四角いりんご」[★18]

まさか時間が自殺したなんてことはあるまい。**袁魯谷教授**は壊れかけた小窓を通して、夜空をほんとうに長い間、見つづけていた。あのまばらな星はそこに打ち付けられているかのように、一つの星も動かず、瞬くことすらなかった。[…]（強調筆者）

例3：「忘れ難き四角いりんご」[★19]

[…] しかしなぜかは分からないが、この日、**造反派**の連中は彼の事を忘れたかのようで、彼を審問する者はなく、また彼を批判する者もなく、そればかりか食事を届けに来る者もいなかった。日が暮れる頃、窓辺に**小さな女の子**がひとりやってきた。明らかに女の子は足元に何かを置いて踏み台にしており、[…]（強調筆者）

「忘れ難き四角いりんご」という作品の登場人物は合計三人である。例2の通り、最も詳しく紹介されているのは袁魯谷教授であり、姓名と職業が明記されている。にもかかわらず結婚しているか否か、どこで働いているか等といった他の情報はない。例3では小さな女の子も出ているが、文脈によって推測できるのは凡その年齢だけで、名前やあだ名すら分からない。加えて、「造反派」は具体的な登場人物というより、団体を表す抽象的な名称である。

例4：「誤った墨」[★20]

娄城の三人の老名人の書画の展覧会には、老いも若きもみな集い、なみいる賢人もことごとくやってきた。

開幕式で、皆の求めに応じ、三人はそろって筆をふるい、腕前を披露することになった。**趙老人**は即座に筆にたっぷり墨をつけると、水面に浮かんだ蓮の葉と水面下の蓮の葉を数枚描いた。その中では蓮の花がつぼみをつけ、今にもほころびようとしており、皆をたいへん喜ばせた。**銭老人**は描く前からすでに胸中では絵が出来上がっていたかのように、ほんの何筆かふるうと、水の中を泳ぐ数匹の魚が生きいきと紙上にあらわれた。一匹一匹がまるで生きているようだった。**孫老人**はちょっと精神を集中させた。岸辺の一本の楊柳が風をうけて揺れる姿は、非常にしなやかで美しかった。[…]（強調筆者）

例4では場所が明記されているにもかかわらず、主人公に関する情報は苗字以外には何ひとつ分からない。書道の達人になるまでの経歴や、描く絵の風格等については、ショートショートを最後まで読んでも分からないことが確認できる。

これらの例から、ショートショートでは登場人物の名前、年齢、容姿や職業といった表面的な内容よりも、その行動や振る舞いの方がはるかに重要であるということが分かる。

2・3　奇想天外な結末

ショートショートのもう一つの特徴は突然で予想外な結末である。イソップ寓話と同様に、その道徳的な結末は読者に種々雑多なことについて反省させるように書かれているのである。ここで一例を挙げて説明する。

例5：「今は今、あの時はあの時」[★21]

[…] ひげ班長たち四人が相次いで目を覚ましたのは、炭鉱病院のベッドの上だった。その後まもなくして、四人は回復して退院した。すべてがもとに戻った。大馬は大馬のままで、三頭はあいかわらず三頭、温はというともとの意気地なしの温だった。誰かが坑内で言ったことをもちだしても、お互いに全てを忘れてしまったようだった。**ただひげ班長だけは、こっそりと裁判所へ行き、訴えを取り下げた。**（強調筆者）

奇想天外な結末はショートショートの特徴の中でおそらく最も把握しにくい概念であろう。なぜなら、物語を最初から最後まで読み通さなくてはそのあらすじが分からず、結末のどこが予想外であるか分かりようがないからである。例5は、ひげ班長たちが突然の崩落事故で炭鉱に閉じ込められ、四人がもし救出されたらどうしたいかを討論するという話である。ひげ班長は最初様々な理由で弟を訴えたいと主張しているが、後の三人とは違い、救出された際に一変して一人静かに訴えを取り下げに行く。そこで初めてこの話の意外な結末を読者が理解するのである。

もっと多くの例をここで挙げることもできるが、ショートショートの奇想天外な結末を完全に味わうためには全文を読む必要があるので、本稿では紙面の都合上、深くは掘り下げない。

2・4　社会に対する批判的態度

周知の通り、現在の中国では政府に都合の悪いことについては自分の意見をなかなか表明できない。当局の検閲を受けず現代社会に対する批判的な見解を表明する良い方法は、自分の意見を文学を通じて行間に控え目に表現することである。ショートショートはそのための絶好のツールとなる。ここで2つの例を挙げて説明する。

例6：「助け合って生きる」[★22]

[…] しかし、お婆さんはまだ落ち着かないまま市場に到着するやいなや、赤い腕章をつけた人が近づいてきて、「卵を売るのは株式市場の投機と同じだ」、「資本主義への道だ」と言い出したのだ…… […]

例7：「しばらくの間、息子を独立させよ」[★23]

[…] この年齢にもかかわらず、息子は一度も買い物をしたことがなく、一度も食事の支度をしたことがなく、一度も洗濯をした

ことがなく、一度もモップで床を掃除したことがないのである。ベッドもいつも母親が整えてくれていた。[…]

例6の舞台は文化大革命である。飢餓や極貧のため中国人にとって非常に過酷でつらい時代であった。50年後の現在でもこの時代を直接批判することは難しい。そのため凌鼎年は作品を通じて当時のことを直接批判するのではなく、紅衛兵のせいで祖母が大変な目にあったことを読者に語ることで、紅衛兵が恐怖と共に支配していたことを間接的に示唆しているのである。

続いて例7では〈一人っ子政策〉という、現在の中国における極めて重要な問題が語られている。親は子供が一人しかいないので面倒見が良く、力仕事はさせない。その結果、その子供は非常に怠惰で我がままになってしまう傾向にある。このショートショートを通して、凌鼎年は一人っ子政策を直接批判する代わりに、その政策の否定的な結果を暗示し、読者にその政策がもたらした深刻な問題について考えさせようとしているのである。

言うまでもなく、他の文学ジャンルもこのような特徴があるが、ショートショートの場合はほぼ毎回、社会批判的な要素が含まれている。

2・5　風刺と皮肉の要素

他にも、ユーモアを与え、最後の落ちの効果を高めるために、風刺と皮肉の要素がしばしば挿入される。

例8：「菊愛好家」[24]

1　[…] 菊爺の頭の中には、菊の花のことしかなく、それ以外は申し訳ないが、何一つ本人の考えはなかった。新聞で菊の花展が開催されるニュースを見れば必ず自費で出向いた。そこに行くと、まず緑の菊が展示されているかどうか確認する。そして展示の緑の菊を何度も何度も鑑賞した後で、立ち去る時には、「あれは本物の緑の菊じゃない！」と言い、自分の緑の菊への優越感を味わいながら家に帰った。そして自分の緑の菊をさらに愛でるのである。[…]

2　[…] 最後に花は枯れ、その魂は線香の煙のように天に昇っていった。こうして、「菊爺」が生涯をかけて大切に育ててきた、皇室の菊と同系統の本物とされる「緑の菊」は、その生涯を閉じた。[…]

例8の1では、菊に情熱を傾ける「菊爺」という老人が、他の菊愛好家より自分の方が優れていると思い込み、気取って他の菊愛好家を見下している。しかし、例8の2で分かるように、この老人はプライドと被害妄想のために、知らず知らずのうちに自分の大好きな緑の菊を死なせてしまうのである。上記の作品は、自画自賛する人間は必ずいつか運命に捕らわれ、非常に大きな代償を払うことになるということを皮肉ったものである。

3　凌鼎年の経歴

次に、中国だけでなくアジア各国で知られている、ショートショート作家凌鼎年の経歴に目を向けたい。凌鼎年の人生は決して平坦ではなかった。国際的に認められたショートショートの達人として立身出世するまでには、長い年月を要し、長く困難な道のりを歩んだのであ

る。あらゆることについて書くことをやめず、非常に現実的なキャラクターの日常生活を描写する一方、私生活について語ることは少なく、少数のインタビューや散文を通じて自分を垣間見せている。

この作家に関する最も包括的な資料の一つは二〇一四年に出版された『世界の中国語微型小説作家の微自伝』[25]にあり、下記の略歴に記載されている内容の多くは本書より引用した。

3・1　青年時代

凌鼎年は一九五一年、江蘇省の太倉で生まれた。故郷は歴史的かつ文化的に重要な役割を担ってきた上海、南京、無錫、蘇州、杭州、紹興に程近い。育ってきたこのような環境が、将来の作品を生むインスピレーションの源になったことは間違いないだろう。彼は幼い頃から作文に優れた才能を発揮している。小学校の三年次には作文で最優秀の成績を取り、五年次には江蘇省の学生の中で第二位の作文賞を獲得している。

一九六六年、中国では文化大革命が起こり、10年間にわたり中国人は阿鼻叫喚の状態に陥った。数百万人もの大学生や文学者等が田舎に派遣され、強制的に田舎仕事をさせられた。この厳しい状況の中で、一九七〇年、凌鼎年は外国と関係があることを疑われ[26]、山東省微山湖の大屯炭鉱に強制的に送られている。その後20年間にわたり、労働者、学校教師、地元の新聞編集者等、様々な職業に就く羽目になり、過酷な日々を送った。

しかしながら、「玉磨かざれば光なし」ということで、苦しい経験の中から、数年後に書き始めた物語の源泉となる多くの要素が引き出されることになる。例えば、一九九四年に出版された「今は今、あの時はあの時」（此一時、彼一時）というストーリーは、炭鉱に閉じ込められた4人の鉱夫たちの反省のシーンを描いており、舞台になるその炭鉱はおそらく、凌鼎年が住んでいた微山湖に近い大屯炭鉱に着想を得たと考えられる。

3・2　無名の若者から著名な作家に

凌鼎はショートショートの名手になる前に、中篇小説や詩など他の文学ジャンルにも挑戦した。初期の小説は同業者の興味を引かなかったものの、詩は中国文学界へ入るきっかけとなり、名を成すチャンスとなった。ある文学会に出席していた際、占い師に声をかけられ、「あなたは純粋の漢人ではない」と告げられている。それを基に自分の出自を調査し、先祖の一人が清朝の宮廷医師で、醇親王（一八四〇－一八九一）を治療した事から満州の王女と婚姻することになったことが分かった。したがって、凌鼎年は遠い祖先から満州族の血を受け継いでいる。

一九八五年、徐州で発行されていた雑誌『彭城藝苑』に初のショートショート『大地が震える時』（當大地震動的時候）を発表している。この作品は終わることのない情熱と、才能の開花の始まりであった。改革開放後に吹き始めた自由の風は凌鼎年の想像力を大いに刺激している。

一九八九年には微山湖畔に住んでいる老婆を取材しに行き、その資料を活かして短編小説の著作に挑んでみたが、記憶に残る業績に至らなかったため、執筆作品はショートショートに集中することに決めた。

一九九〇年二月、ようやく故郷の太倉に帰ることができ、作家として活躍し始め、知名度を上げている。その3カ月後「全国創作小説執筆会議・理論セミナー」（全國小小説創作筆會暨理論研討會）に招かれた事が彼のキャリアを押し上げた。なぜなら、この会議で20人ほどの作家

が「中国ショートショート作家の第一世代」（中國第一代微型小説作家）として選ばれ、凌鼎年はその一人であったからである。そのおかげで凌鼎年はショートショートを書くことを天性の職業とした。

このような状況で、一九九一年四月には『もう一度若くなって』（在年輕一次）という最初のショートショート集を、一九九四年五月には第2集『秘密』を出版した。同年、国際賞である「世界中国語ショートショート大賞」（世界文化微型小説大獎賽）を受賞した。

現在は作家としての活動以外に、数々の作家協会の一員となっている。二〇二二年現在、すでに5000点以上ものショートショート作品を出版し、中国の魯迅賞や茅台賞等、無数の文学賞を獲得している。凌鼎年の作品は日本語以外、韓国語、英語、フランス語[27]等、10か国語以上の言語に翻訳されている。

4　凌鼎年の文体

中国ではショートショートの作家数は非常に多いにもかかわらず、凌鼎年のような文体を持った作家はほぼいないと言っても過言ではない。なぜなら、他の作家と大きく異なり、凌鼎年の作品を特徴づける下記の五つの点のおかげで、独特な風情や雰囲気が醸し出されているからである。

1　四字熟語やことわざの頻繁な使用
2　唐詩や宋詩の引用
3　歴史的、文化的な要素の頻繁な採用
4　専門用語のリストアップ
5　洗練された、非常に正確で精巧な単語の使用

ここではいくつかの例を挙げながら、これらの特徴を詳しく説明する。

4・1　四字熟語やことわざの頻繁な使用

洗練された文章と言えば、正確で精巧な言葉の使用のみならず、四字熟語やことわざ等といった文化的背景を感じさせる要素も重要である。以下の例のように、凌鼎年は文に品格を持たせるために、皆に広く知られている漢文を頻繁に使っている。

例9：「蓮茶[28]」

（中国語）［…］説起來僅一面之交、交情不深。不過無妨、裘一鳴甚至認爲有些事、淺交比深交好、**君子之交淡如水**嘛。［…］

（日本語）［…］一度しか会ったことがないので、友情は深くない。しかし、そんなことはどうでもよくて、ある事柄については、深い交わりよりも広く浅い交わりの方がいいと、裘一鳴が思っている。結局、**君子の交わりは淡きこと水の如し**なのではないか。［…］（強調筆者）

上述の「君子の交わりは淡きこと水の如し」の部分は、荘子[29]という書物より直接引用されているものである。中国の読者は漢文に由来するこのことわざを知っており、理解しにくい言葉ではない。このただ一文のおかげで文章は格段に美化されるのである。加えて、凌鼎年は文末に「嘛」（じゃない？）という口語の助詞をつけることで、荘子のこの一文を更に身近なものにする手法を取り入れており、非常に特徴的な文体である。

4・2　唐詩や宋詩の引用

凌鼎年は唐詩や宋詩を引用し、文中に挿入する技が抜群に優れている。これには高度な文学的教養が必須で、更に難しい。また、ショートショートはもともと長さが非常に限られているので、その長さに合わせた適切で短い詩の選択は特に重要で、余人にもって替えがたい。

それを説明するために、「蓮茶」から一例を挙げたい。主人公はそこで田舎町の風景に対する深い感情を表す。

例10：「蓮茶」[★30]

（中国語）［…］開春、他欣賞〝小荷才露尖尖角、早有蜻蜓立上頭〟的景色：入夏、他陶醉於〝映日荷花別様紅〟的意境里：深秋、他體會〝留得殘荷聽雨聲〟的趣味。［…］

（日本語）［…］春には、「**蓮の葉の芽は若々しく尖っている。既に、トンボはそこに止まっている**」ような景色を鑑賞している：夏には、「**陽光に映える紅蓮の花の気高さと美**」に魅力されている：晩秋には、「**傷ついた残りの蓮が雨の音を聞いている**」ような喜びを味わっている。［…］

（強調筆者）

例10に目を通すと、四季折々の景色を描写する3編の詩は単なる詩としてでなく、形容詞のように使われていることが分かる。詩やことわざ等をそのまま文中に使用するというこの特徴は、凌鼎年以外のショートショート作家にはほぼ見られない。

4・3　歴史的、文化的な要素の頻繁な採用

凌鼎年は作品の信憑性を高めるために、実際に存在する場所に物語を固定し、調査した実在する要素に基づいた情報を提供する。

例11：「四要堂の子孫」[★31]

（中国語）婁城在文物普查時、發現了一座破舊的明代建築。据上了年紀的講、早先的主人姓廉、原本好像叫〝四要堂〟。［…］

（日本語）娄城の遺産調査で、老朽化した明代の建物が発見された。年配の人の話によると、その昔の持ち主は廉という名で、もともとは「四要堂」と呼ばれていたらしい。［…］

例11では、凌鼎年が寧波からそう遠くない実際に存在する娄城（太倉の別称）を舞台にストーリーを展開していることが分かる。なお、そこに記されている情報は少なくとも部分的には、同市当局が行った遺産調査を通じて得られたものであることが明記されている。さらに、この建物が明の時代に建てられたものであることも分かる。つまり、この作品は最初の文章からいくつかの歴史的、かつ文化的要素が含まれているため、単なるストーリーでなく歴史的な物語と言えるだろう。

例12：「あの竹林のあの木」[★32]

（中国語）時報報道一：古廟鎮發現特大靈芝。［…］

（日本語）地元新聞に掲載されたニュースのひとつ：古廟鎮で巨大な霊芝が発見された。［…］

例12で凌鼎年は冒頭からストーリーの舞台になる古廟鎮に言及している。実際にこの地区は存在し、娄城の一部になっている。さらに、いくつかの作品、特に「不老長寿の薬」という作品では頻繁に「霊芝」というキノコの名前を取り上げている。このように凌鼎年の作品

の大部分で、実在する場所や、「霊芝」のような固有名詞を使用することでリアリティー感を読者に印象付けていることが確認できる。

4・4　専門用語のリストアップ

四字熟語、ことわざ、歴史的要素の使用は他の作家の作品にも見られるが、文中における専門用語のリストアップは非常に際立っており、これらが凌鼎年の作風を最も印象付ける要素と言っても過言ではない。その完全無欠な美しさを二つの例で紹介する。

例13：「菊愛好家」

（中国語）［…］他家屋裡屋外全是菊。什麼〝**帥旗**〟〝**墨十八**〟〝**緑刺**〟〝**緑水長流**〟〝**楓葉蘆花**〟〝**鳳凰轉翅**〟〝**貴妃出浴**〟等等、簡直就是一個小型菊展。數百品種中、老菊頭最寶貴的自然是〝**緑荷**〟。［…］

（日本語）［…］彼の家の内外には菊の花がいっぱいある。「**将軍の旗**」「**十八枚の墨色の花びら**」「**緑の茨**」「**永遠に流れる緑の水**」「**もみじとアロエ**」「**羽ばたく鳳凰**」「**お風呂から上がった姫**」など、簡単に言うと、ミニ菊花展である。数百種ある古菊の中で最も価値があるのは、当然ながら「緑の菊」である。［…］（強調筆者）

この抜粋から分かるように、凌鼎年は菊の品種の名を7種類も挙げている。これらの詩的な花の名前は文章に芸術的なタッチを加えるだけでなく、物語を更に現実的なものにする。また、著者が書き始める前にテーマについて十二分にリサーチをしたことを間接的に示している。

例14：「**貨幣を持った貧乏人**」[34]

（中国語）［…］錢百萬的錢幣使小鎮人打開眼界、其中有**空首布**、有**齊刀**、有**秦半兩**、有**漢代壓勝錢**、有**永安五銖**、有**開元大錢**、有**北宋鐵母**、有**太平天國真錢**、更多的是**清代的錢幣**。［…］

（日本語）［…］錢百万の貨幣のコレクションは小さな町の住民に視野を広げるきっかけを与えてくれた。その中には、**空首布**、**斉刀**、**秦半両銭**、**漢代の厭勝銭**、**永安の五銖銭**、**開元の大銭**、**北宋の鉄母銭**、**太平天国の背聖宝銭**などがあるけれども、コレクションの多くは**清代の銭幣**なのである。［…］（強調筆者）

この例でも、凌鼎年が古銭を見事にリストアップしていることがよく分かる。上記の詩的な花の名前に比べ、これらは極めて正確な専門用語である。これは著者がそのテーマについて調べ上げただけでなく、物語のテーマに対する好奇心が旺盛であることを示している。

このようなリストアップの例は凌鼎年の著作に非常に多く見られ、ここですべてを紹介することはできないが、これが他のショートショート作家とは一線を画す著者の顕著な特徴であることは間違いない。

4・5　洗練された、非常に正確で精巧な単語の使用

この点については数点の著作を全文、しかも中国語で紹介しなければならないため、本稿で取り上げることは難しい。しかしながら、上記のような様々な例から、なぜ凌鼎年の文体が特徴的で洗練されているのか、どのように正確で精巧な言葉を使っているのか、いかにして

天衣無縫な文章を書くのかを理解することが可能であろう。

結　論

本稿では、ショートショートという独特な文学ジャンルに焦点を当てた。このジャンルは中国の国境を越えて知られ始めつつあるとはいえ、他の文学ジャンルに比較すれば研究がまだ少ないことを認めざるを得ない。

まず、ショートショートの発展を出来る限り分かりやすく説明した上で、その特徴を浮き彫りにするよう試みた。ショートショートは他の文学ジャンルと多くの特徴を共有しているものの、そのオリジナリティはこれらの特徴がすべて組み合わさって生まれるのである。

そこで、理論的な説明だけでは不十分なため、ショートショート作家の第一人者として活躍している、注目すべき凌鼎年を紹介した。他の作家の作品も非常に質が高いのではあるが、凌鼎年の作風が独特なのは、多くの歴史的、かつ文化的要素を短文に組み合わせ、ある社会現象の現実を正確に捉え、民衆の感情を冷静沈着でありながら豊かで刺激的な文体で表しているからである。

あまり知られていないこのジャンルと、日本語を含む多くの言語に翻訳されているこの非常に活動的な作家について、読者の好奇心を喚起することができたなら幸いである。

謝　辞

二〇二二年六月一五日、筆者は学習院女子大学で開催されたフォーラム「ヨーロッパにおける日本研究の最前線」にオンラインで参加し、〈中国人作家の凌鼎年（リンディンニエン）〉と〈ショートショート〉について発表させていただきました。この二つの課題について、フォーラムで紹介した内容をまとめ、修正を加えた本稿を皆さまにご紹介することができ、光栄に思います。

何よりもまず、日本語による発表の機会を与えてくださった学習院女子大学国際文化交流学部国際コミュニケーション学科、中島崇文教授に深謝の意を表します。また、ジュネーヴ大学文学部東アジア研究学科日本学専攻、小幡谷友二先生には、本稿の作成にあたり適切なご助言を賜りましたことを感謝申し上げます。最後に、多数の資料を提供頂いたジュネーヴ大学文学部東アジア研究学科中国学専攻、謝紅華先生にも深くお礼申し上げます。

参考文献

日本語

『蓮霧』第八号、日本世界華文微型小説研究会、二〇一五年。

『蓮霧』第九号、日本世界華文微型小説研究会、二〇一六年。

渡邊晴夫　訳者代表『凌鼎年ショートショート選：もう一度若くなって』、DTP出版、二〇一七年。

中国語

凌鼎年著　『那片竹林那棵樹』、世界圖書出版公司、二〇一四年。

龍鋼華主編　『世界華文微型小説總論（上冊）』、中國社會科學出版社、二〇一八年。

龍鋼華主編　『世界華文微型小説總論（下冊）』、中國社會科學出版社、二〇一八年。

フランス語

GSCHWEND François-Karl,《Le thé parfumé au lotus》, *Impressions d'Extrême-Orient* [En ligne], n° 14, 2022, (http://journals.openedition.org/ideo/2595).

HOSHI Shinichi (auteur), GORGES Florent (traduction), *Bokko-chan*, Omake books, Paris, 2020.
POIZAT-XIE Grâce et GOLDSCHMIDT-CLERMONT Delphine, *Pourquoi je suis rentré tard ce soir*, L'Asiathèque, Paris, 2021.
POIZAT-XIE Grâce et GSCHWEND François-Karl, *Brèves*, vol. 117, 2021.

★註　釈

1 「微型小説」という言葉は中国語の「微型小説」(wēixíng xiǎoshuō) から直訳したものである。

2 日本語では「ショートショート」以外も、「掌編小説」等、様々な名称があるが、本稿では便宜的にショートショートという言葉を使用する。

3 国学院大学教授。一九三六年生まれ。東京大学大学院修士課程修了。中国語学・文学専攻。

4 渡邊晴夫「中日微型小説比較研究の開始—研究をふり返って」『蓮霧』第九号、日本世界華文微型小説研究会、二〇一六年、3頁。

5 掌編小説は字数が明確に定義されておらず、２００字から８００字以内が基準になっているようである。

6 フランス語訳も刊行されている。HOSHI Shinichi (auteur), GORGES Florent (traduction), Bokko-chan, Omake books, Paris, 2020.

7 渡邊晴夫他訳『凌鼎年ショートショート選：もう一度若くなって』、ＤＴＰ出版、二〇一七年。

8 この専門誌は日本世界華文微型小説研究会によって出版されている。詳しくは下記を参照 https://www.weixingxiaoshuo.jp/

9 本稿で使う「中国語」は中国の普通話および台湾の国語の両方を指す。

10 実際には、制限を設けることは非常に難しい。上記の数字はいくつかのショートショートのコンテストの募集要項をもとに計算したものである。例えば、二〇一八年に開催された第三回「ショートショート大賞」の場合は、《４００字詰め原稿用紙換算1枚から15枚まで》、つまり４００字と６０００字の間とされ、平均３２００字に相当する。

11 この数字については：Grâce Honghua POIZAT-XIE,《Micronouvelles en langue chinoise》, in *Brèves*, vol. 117 (2021), p. 4 参照。

12 渡邊、前掲書、4頁。

13 フランスでは出版社によって、スペースを含めて１０００字あるいはＡ４一枚という制限が設けられているが、コンセンサスはほぼないようである。また、星新一の『ボッコちゃん』をフランス語に翻訳した Florent GORGES 氏は「ショートショートは最大10分で読めるストーリーです」と述べている。詳しくは：https://www.journaldujapon.com/2020/03/02/bokko-chan-decouvrez-le-maitre-de-la-micro-nouvelle-shinichi-hoshi/（参照二〇二二年八月二日）。

14 一部の作品は凌鼎年の作品集『あの竹林のあの木』の中国語版からのものである。詳しくは凌鼎年『那片竹林那棵樹』、世界圖書出版公司参照。

15 「蓮茶」の仏訳については：François-Karl GSCHWEND,《Le thé parfumé au lotus》, *Impressions d'Extrême-Orient* [En ligne], n° 14, 2022, (http://journals.openedition.org/ideo/2595)。他の作品の仏訳については：François-Karl GSCHWEND, Brèves, vol. 117, 2021, pp. 56-126。

16 出版されたショートショートの中で、『蓮茶』と『天下一の切り株』はいずれも２０００字を超える例外的な字数の作品である。

17 渡邊晴夫訳「了悟禅師」『蓮霧』第九号、日本世界華文微型小説研究会、二〇一六年、11頁。

18 松野敏之訳「忘れ難き四角いりんご」『蓮霧』第九号、日本世界華文微型小説研究会、二〇一六年、25頁。

19 同書、26頁。

20 渡邊奈津子訳「誤った墨」『蓮霧』第八号、日本世界華文微型小説研究会、二〇一五年、23頁。

21 久米井敦子訳、「いまはいま、あの時はあの時」『蓮霧』第九号、14頁。

22 和訳を入手することが不可能であったため、ここでは筆者が訳出した。和訳について詳しくは、「助け合って生きる」『蓮霧』第十号、日本世界華文微型小説研究会、二〇一七年参照。

23 和訳を入手することが不可能であったため、ここでは筆者が訳出した。和訳について詳しくは、「しばらくの間、息子を独立させよ」、渡辺他訳『凌鼎年ショートショート選：もう一度若くなって』、二〇一七年参照。

24 和訳を入手することが不可能であったため、ここでは筆者が訳出した。和訳について詳しくは、渡邊他訳『凌鼎年ショートショート選：もう一度若くなっ

て』「菊愛好家」、二〇一七年参照。

25 凌鼎年主編『世界華文微型小説作家微自傳』、捷克華文作家出版社、二〇一四年。

26 凌鼎年は「背負《海外關係》十字架」（海外との関係という十字架を背負う）と述べている。

27 François-Karl GSCHWEND, *Brèves*, vol. 117, 2021, pp. 56-126.

28 調べた限りでは和訳はまだないようなので、ここでは筆者が訳出した。

29 『荘子』は荘子（紀元前三六九年頃–紀元前二八六年頃）が著書とされる道家の文献である。上の例の一節は『荘子』の外篇「山木」より引用した。

30 調べた限りでは和訳はまだないようなので、ここでは筆者が訳出した。

31 調べた限りでは和訳はまだないようなので、ここでは筆者が訳出した。

32 調べた限りでは和訳はまだないようなので、ここでは筆者が訳出した。和訳について詳しくは、渡邊他訳「あの竹林のあの木」『凌鼎年ショートショート選：もう一度若くなって』、二〇一七年。

33 調べた限りでは和訳はまだないようなので、ここでは筆者が訳出した。和訳について詳しくは、前掲書、渡邊他訳「菊愛好家」。

34 調べた限りでは和訳はまだないようなので、ここでは筆者が訳出した。